

第2節 チャートを主体とした石器群の比較検討

1 目的と方法

これまでの近畿地方の編年案は、瀬戸内技法を中心とし、その発展・崩壊というプロセスに則り捉えられてきた(松藤 1980・1992、久保 1989など)。言い換えれば、ナイフ形石器の形態組成・調整技術、剝片剥離技術などをもとにして編年を組み立てる方法が主流であったといえる。しかし、前述のような特徴が希薄な石器群に対しては、評価が非常に困難になってしまうという問題点が挙げられる。それはひとえに明確な技術的特徴を欠くためである。たとえば、今回とり挙げるブロック1などはその典型といってもいい。ところで、ブロック1はチャートの多用、剝片・石核の小形化によって特徴づけられる(第8章第3節を参照)というが、この見解にしたがえば固有の様相も認められ、その様相をどのように整理し、編年的に位置づけるかが問題となる。ただ、そのためにはチャートを主体とする石器群の一般的な特徴を明確化する必要があり、したがってチャートの分布域である丹波帯における石器群との比較が重要となってくる。

このような状況のなか、ブロック1の位置づけについて考えるとき、どうしたらよいのか。いずれをとっても、瀬戸内技法の有無がその基準としての重要な位置を占めているのは否めない。では、他の要素はどのように把握されているのかが問題となる。そこで、ここでは石器群のもちえている要素(石器群の実態)をこれまでとは異なる視点から検討する。その方法として、定量的な属性分析を用いることとする。どのような剝片が生産されたのかということを明らかにするためである。遺跡に残されたものは、極端にいえば残滓といえるかもしれない。しかし、多く残されたものは使用されたものと相關関係を示すという前提(野口 1995)に立ち論を進めてゆく。こうした積み重ねが、石器群に対する別の視点を与えると考えられるからである。

今回は、属性分析という視点から技術の実態(石器群の実態)をとおして、石器群の編年的位置づけについて考える。そこで、まずブロック1の石器群の実態を把握することを目的とし、ブロック3・6と比較検討したのち、チャートを主要石材とし、層位的に明らかな兵庫県下の板井寺ヶ谷遺跡、七日市遺跡と同様に比較する。

2 ブロック間比較

ブロック1とブロック3・6の類似・相違点を明らかにすることを目的とし、ブロック間で項目ごとに検討してゆく。内容的に第8章第3節と重複する部分が多いため、ここでは簡単に述べるにとどめるが、いくつかの基本項目、すなわちブロック別にみた石器の出土点数・石器組成、石器石材について概観する。続いて、剝片の大きさに関する属性ならびに打面の形態などを比較し、各ブロックの内容差について検討する。ちなみにここで扱う資料は、それぞれの項目に応じて点数が異なる。なぜなら、大きさなどでは、完形でなければ比較にならないからであり、たとえば、長さが折損値であっても打面が残置していれば打面の検討は可能といった資料も存在するからである。

まず、石器組成は第5章第2・4・6節の表9・11・14に示すとおりである。一見して、ブロックによる違いは明らかである。たとえば、背部整形剝片などはブロック3に限定されており、他のブロックからは確認できていない。また、近畿地方では非常に稀少な器種である円形搔器や角錐状石器は、ブロック6からの出土となっている。さらに、ブロック1では、剝片と碎片の比率がほぼ1対2であるのに

対し、ブロック3・6では、2対1と逆転している。また、他のブロックと比べると、ブロック1では石核が非常に少ないことも指摘できる。続いて石材をみると、ブロック1ではチャートが317点(67%)、サヌカイト145点(31%)であり、前者が主体を占めている。これに対し、ブロック3では、サヌカイトが438点(92%)、チャートが30点(6%)、ブロック6では、サヌカイトが407点(74%)、チャート139点(25%)とサヌカイトが主体となり、ブロック1とは全く異なる様相を呈する¹⁾。

(1) 定量的属性

次に検討するのは剝片の定量的属性である。まず「最大長」・「最大幅」・「最大厚」・「重量」についての検討をおこなう。それぞれ石材別に、ブロック1・3・6の順に記す(表86)。

「最大長」は、ブロック1・3・6の順でみていくと、チャートでは平均値が20.28mm、23.50mm、25.69mm、最大値35.0mm、42.0mm、46.0mm、サヌカイトは、平均値17.54mm、21.38mm、23.05mm、最大値40.0mm、57.0mm、59.0mmとなる。いずれのブロックにおいても、平均値のみをみた場合、サヌカイトよりチャートの方が大きいことがわかる。また、各ブロックを比較したとき、チャート・サヌカイト両石材ともブロック1が平均値・最大値とも最も小さく、ブロック6が大形であり、ブロック3はややブロック6にやや近い様相を呈している。

「最大幅」では、チャートは平均値19.86mm、22.67mm、21.41mm、最大値は36.0mm、26.0mm、39.0mmとなる。一方、サヌカイトは、平均値19.78mm、22.83mm、23.76mm、最大値は47.0mm、68.0mm、61.0mmとなっている。長さとは異なり、平均値は各ブロック内では両石材とも大きな差異はみられない。しかし、ブロック3・6は非常に近い値を示すが、それに比してブロック1は両石材とも小形である。

「最大厚」は、チャートでは平均値が5.43mm、8.99mm、7.02mm、最大値は18.3mm、19.3mm、19.3mmである。サヌカイトは平均値4.46mm、5.60mm、5.34mm、最大値は10.0mm、26.2mm、18.0mmである。ブロック3のサヌカイトの最大幅を除き、いずれの値もチャートがサヌカイトよりまさっている。ここでも、両石材ともブロック1が最も小さい。

先の順序にしたがい長幅比は、平均値103.75、129.48、130.30、最大値184.2、247.1、279.1となる。サヌカイトは、平均値88.7、97.76、96.94、最大値164.3、300.0、210.0である。ブロック3のサヌカイトの

表86 定量的属性の代表値・標準偏差

BL		長さ(mm)		幅(mm)		厚さ(mm)		長幅比		打面幅(mm)		打面厚(mm)	
		Ch	Sa	Ch	Sa	Ch	Sa	Ch	Sa	Ch	Sa	Ch	Sa
1	平均値	20.28	17.54	19.86	19.78	5.43	4.46	103.75	88.74	11.05	12.81	4.19	4.00
	最大値	35.0	40.0	36.0	47.0	18.3	10.0	184.2	164.3	19.9	31.1	9.5	12.2
	最小値	11.0	8.0	10.0	10.0	1.7	1.4	61.9	34.8	3.4	3.8	1.2	1.3
	標準偏差	6.66	7.95	7.13	8.06	3.96	1.90	33.82	36.8	5.18	6.39	2.34	2.32
	N =	23	35	29	36	53	65	14	21	23	26	28	34
3	平均値	23.50	21.38	22.67	22.83	8.99	5.60	129.48	97.76	16.40	16.42	6.97	5.03
	最大値	42.0	57.0	26.0	68.0	19.3	26.2	247.1	300.0	26.6	62.0	9.8	27.5
	最小値	16.0	7.0	17.0	7.0	2.0	1.0	65.4	30.8	14.0	3.4	5.3	1.1
	標準偏差	12.40	9.91	4.93	9.91	5.47	3.27	86.80	51.15	6.02	9.43	2.59	3.38
	N =	4	169	3	150	8	235	4	135	4	122	6	155
6	平均値	25.69	23.05	21.41	23.76	7.02	5.34	130.30	96.94	11.69	14.94	4.87	4.57
	最大値	46.0	59.0	39.0	61.0	19.3	18.0	279.1	210.0	32.1	42.9	15.2	15.3
	最小値	12.0	9.0	9.0	7.0	2.4	1.2	44.8	41.5	1.4	3.0	0.5	1.2
	標準偏差	8.71	8.55	6.75	10.68	3.96	2.80	59.05	35.29	7.01	8.42	3.44	2.56
	N =	35	128	41	130	66	221	39	113	31	107	39	146

最大値が際立つ以外は、いずれの値もチャートがサスカイトを上回るという共通性を示す。つまり、チャートは縦長状、サスカイトは横に長い傾向がうかがえる。また、ここでも両石材ともブロック1の値が小さく寸詰まりであることがわかる。

次に、「打面幅」と「打面厚」についてみてみる。まず、打面幅では、チャートの平均値はそれぞれ11.05mm、16.40mm、11.69mm、最大値は19.9mm、26.6mm、32.1mm、サスカイトは平均値12.81mm、16.42mm、14.94mm、最大値は31.1mm、62.0mm、42.9mmとなる。後者が前者より若干大きい。打面厚では、チャートは平均値4.19mm、6.97mm、4.87mm、最大値は9.5mm、9.8mm、15.2mm、サスカイトは4.00mm、5.03mm、4.57mm、最大値は12.2mm、27.5mm、15.3mmとなる。チャートの方がサスカイトよりやや大きい傾向がみられる。これらは、「最大幅」・「最大厚」と共通しており、石材に起因するものであろうか。

(2) 定性的属性

次に定性的属性（打面形状・打面構成・背面構成・自然面の付着程度）についてみていく。

いずれのブロックでも、打面をとどめたものが半数以上を占め、とくにブロック3は全体の183点(75.9%)が打面を有している(表87)。一方、ブロック1では他の2ブロックに比して打面側が折損したものの割合が大きい(42点、35.6%)点が目立つ。ただし、ブロック1も含め、各ブロック間では石材による違いはみられない。

打面形状(表88)は、いずれのブロックにおいても「平坦」が最も多く、「山形」がそれに次いでいる。しかし、その比率は各ブロックにより若干異なる。「山形」が最も多いのはブロック3であり、46点(25.1%)を占める。ついでブロック6が33点(17.2%)、ブロック1が10点(13.2%)となる。この比率の大小は、サスカイト構成比と同じであり、打面形状と石材の結びつきが指摘できるであろう。

打面構成は、すべてのブロックにて、单削離面と多削離面がその大部分を占めており、若干前者が上回る(表89)。ただし、石材別にみると、いずれのブロックにおいてもサスカイトは单削離面が多削離面より多いのに対し、チャートでは、わずかながら後者が前者を上回っており、石材による違いがみられる。また、ブロック1は、他のブロックに比べて極端に自然面打面が少ない。

背面構成をみると、各ブロックとも主要剝離面と同一方向の剝離が圧倒的に多い。次いで、主要剝離面の同一軸と他方向からなる2方向により構成されているものが多くみられる。これらの点では3ブロックとも共通している。しかし、石材により若干異なる傾向がみられる。チャートは1方向もしくは2方向から構成されているのに対し、サスカイトは3方向からなるものもわずかながらみられるのである。つまり、サスカイトはチャートと比較して打面転位が多い状況が看取される。

最後に自然面の付着をみると、チャートでは全面もしくは一部に自然面が付着するものは、ブロック1は12点(22.3%)、ブロック6が24点(36.4%)そしてブロック3は2点(25.0%)となり、各ブロックとも自然面の付着がみられないものが多い(表90)。一方、サスカイトではブロック1から順にみると、7点(10.4%)、92点(39.1%)、94点(42.5%)とその付着率に差がみられる。

以上、簡単にそれぞれのブロック出土剝片の属性について概観してきた。

定量的属性については、石材を問わずブロック1が最も小形であることがわかった。一方、定性的属性では、自然面の付着や打面の有無などにおいてはブロック3・6が類似する結果を示し、ブロック1とは若干の違いがみられる。しかし、先述以外の打面形状や打面構成、背面構成などはブロック間の相違というよりは、石材の違いとしてあらわれているといえるであろう。つまり、ブロック1と同3・6

の差異は、ブロック1の剥片が小形であるという点は指摘できるかもしれないが、石材の違いに起因すると考えられる。そこで、ブロック1と同様にチャートを主体とする近畿地方の遺跡と比較し、ブロック1の実態に迫ってみたい。

表87 打面の有無

	BL1						BL3						BL6					
	度数	%	Ch	%	Sa	%	度数	%	Ch	%	Sa	%	度数	%	Ch	%	Sa	%
あり	76	64.4	34	63.0	42	65.6	183	75.9	2	100.0	181	75.7	225	70.0	42	66.7	158	71.5
なし	42	35.6	20	37.0	22	34.4	58	24.1	0	0.0	58	24.3	96	30.0	21	33.3	63	28.5
合計	118	100.0	54	100.0	64	100.0	241	100.0	2	100.0	239	100.0	321	100.0	63	100.0	221	100.0

表88 打面形状

	BL1						BL3						BL6					
	度数	%	Ch	%	Sa	%	度数	%	Ch	%	Sa	%	度数	%	Ch	%	Sa	%
平坦	53	69.7	23	65.7	30	73.2	116	63.4	5	83.3	111	62.7	140	72.9	23	67.6	117	74.1
山形	10	13.2	5	14.3	5	12.2	46	25.1	1	16.7	45	25.4	33	17.2	4	11.8	29	18.4
線状	6	7.9	3	8.6	3	7.3	13	7.1	0	0.0	13	7.3	10	5.2	3	8.8	7	4.4
点状	7	9.2	4	11.4	3	7.3	8	4.4	0	0.0	8	4.5	9	4.7	4	11.8	5	3.2
合計	76	100.0	35	100.0	41	100.0	183	100.0	6	100.0	177	100.0	192	100.0	34	100.0	158	100.0

表89 打面構成

	BL1						BL3						BL6					
	度数	%	Ch	%	Sa	%	度数	%	Ch	%	Sa	%	度数	%	Ch	%	Sa	%
單剥離面	33	52.4	10	35.7	23	65.7	83	52.5	0	0.0	83	54.6	79	43.4	9	24.3	70	48.3
複剥離面	0	0.0	0	0.0	0	0.0	0	0.0	0	0.0	0	0.0	0	0.0	0	0.0	0	0.0
多剥離面	25	39.7	13	46.4	12	34.3	65	41.1	4	66.7	61	40.1	75	41.2	17	45.9	58	40.0
自+剥	1	1.6	1	3.6	0	0.0	0	0.0	0	0.0	0	0.0	1	0.5	1	2.7	0	0.0
自然面	1	1.6	1	3.6	0	0.0	9	5.7	1	16.7	8	5.3	18	9.9	1	2.7	17	11.7
節理面	3	4.8	3	10.7	0	0.0	1	0.6	1	16.7	0	0.0	9	4.9	9	24.3	0	0.0
合計	63	100.0	28	100.0	35	100.0	158	100.0	6	100.0	152	100.0	182	100.0	37	100.0	145	100.0

表90 自然面の付着

	BL1						BL3						BL6					
	度数	%	Ch	%	Sa	%	度数	%	Ch	%	Sa	%	度数	%	Ch	%	Sa	%
全面	9	5.2	3	5.6	0	0.0	4	1.6	0	0.0	4	1.7	11	3.8	1	1.5	10	4.5
一部	49	28.5	9	16.7	7	10.4	90	37.0	2	25.0	88	37.4	107	37.3	23	34.8	84	38.0
なし	114	66.3	42	77.8	60	89.6	149	61.3	6	75.0	143	60.9	169	58.9	42	63.6	127	57.5
合計	172	100.0	54	100.0	67	100.0	243	100.0	8	100.0	235	100.0	287	100.0	66	100.0	221	100.0

3 比較遺跡

ここでは、ブロック1と類似する石材組成を示す兵庫県下の2遺跡（板井寺ヶ谷遺跡・七日市遺跡）について同様な分析をおこなう。先にも述べたように、ブロック1と他の2ブロックとの相違は石材によるものと考えられる。そこで、チャートの分布域(丹波帶)内に位置する石器群と比較する。

まず、簡単に比較遺跡の概要を述べ、続いてブロック間比較でおこなったことと同様の分析・検討をおこなう。今回対象とする点数は実見したもののみであり、数量的にはかなり限定されるが、全体の傾向を反映しているとの前提に立つ。板井寺ヶ谷遺跡、そして七日市遺跡の順で、さらに石材別に検討し

てゆく。ただし、七日市遺跡では、サヌカイトの割合が極端に少ないため、チャートのみを対象とした。なお、七日市遺跡第Ⅲ文化層の実見した資料は、完形剝片が極端に少なかったため、比較資料として充分でないと考え、今回は第Ⅱ文化層のみを扱う。

表91 板井寺ヶ谷遺跡・七日市遺跡 石器組成

遺跡		Tr	Kn	Sc	PE	Dr	Gr	No	De	RF	UF	Fl	Cp	Co	Ax	計
板井寺ヶ谷遺跡 (IT)	Sn	0	12	32	4	2	1	0	0	31	100	558	179	56	1	976
	Ch	0	12	45	2	2	0	0	0	35	85	818	233	104	0	1336
	計	0	24	77	6	4	1	0	0	66	185	1376	412	160	1	2312
	%	0.0	1.0	3.3	0.3	0.2	0.0	0.0	0.0	2.9	8.0	59.5	17.8	6.9	0.0	100.0
七日市遺跡 (NK II)	B	0	1	2	2	0	0	1	2	11	7	131	73	11	0	241
	C	8	6	4	0	0	0	3	1	20	36	214	82	25	0	399
	G	6	4	2	20	0	0	4	4	9	41	424	193	49	2	758
	M	2	1	0	0	0	0	1	0	1	11	104	83	11	1	215
	N	2	0	2	3	0	0	3	1	2	13	134	109	17	2	288
	S	1	4	0	0	0	0	1	0	0	1	20	23	3	0	53
	T	0	0	0	0	0	0	0	0	0	11	14	3	0	28	
	計	19	16	10	25	0	0	13	8	0	109	1038	577	119	0	1982
	%	1.0	0.8	0.5	1.3	0.0	0.0	0.7	0.4	0.0	5.5	52.4	29.1	6.0	0.0	100.0

*板井寺ヶ谷遺跡は石材別、七日市遺跡はブロック別となっている。報告書にもとづき作成。

*板井寺ヶ谷遺跡の出土層点数は、報告書では2,353点となっている。

Tr：小型部分加工石器 Kn：ナイフ形石器 Sc：スクレイバー類 PE：楔形石器 Dr：錐状石器 Gr：彫器 No：抉入石器 De：鋸歯縁石器 RF：2次加工ある剝片
UF：微細剝離痕ある剝片 Fl：剝片 Cp：碎片 Co：石核 Ax：局部磨製石斧

(1) 板井寺ヶ谷遺跡（兵庫県篠山市）

1984年に調査され、近畿地方において石器群が重層的に確認された最初の遺跡である（兵庫県教育委員会 1991）。純層で確認されたATの上位・下位から石器が出土しており、それぞれ上位文化層、下位文化層と呼ばれている。ここでは、チャートを主体とする下位文化層を扱う。報告者によれば、下位文化層の出土点数は2,353点であり、石器組成は、ナイフ形石器・「斧形石器」²⁾・搔器・削器・楔形石器・錐状石器・彫器・局部磨製石斧などであるという（表91）。石材には、チャート・サヌカイト・鉄石英・水晶などが使用されているが、前2者がその大多数を占める。

1) 定量的属性（表92）

板井寺ヶ谷遺跡の対象とする資料は、サヌカイト73点、チャート49点、計122点である³⁾。

「最大長」（表93）は、チャートでは、それぞれ平均値が33.7mm、最大値57.8mmである。30.1～35.0mmにピークがみられ、また35.1～40.0mmにも多く集中する。一方、サヌカイトは、平均値25.3mm、最大値48.2mmとなっており、20.1～25.0mmにピークがみられる。サヌカイトは、チャートに比べて小形（15.1～20.0mm）の剝片が多く、その分布域は小さい。「最大幅」（表94）は、チャートでは平均値32.7mm、最大値74.5mmである。25.1～30.0mmに多く集まる。平均値をみると最大値の影響によりやや大きくみえるが、中央値は29.5mmとなっている。サヌカイトは平均値34.3mm、最大値58.9mmであり、チャートに比べて大きいことがわかる。「最大厚」（表95）では、チャートは平均値9.3mm、最大値21.0mmであり、集中域は7.6～9.0mm、サヌカイトは平均値7.0mm、最大値17.1cmであり、チャートより厚みがすくない。

長幅比(表96)は、チャートでは平均値110.3と最大値220.6であり、80～120に集中しておりやや縦に長いことがわかる。これに対し、サスカイトは平均値76.4、最大値187.2、60～80に多くが集まり、チャートに比して横長の傾向がうかがえる。

続いて、「打面幅」と「打面厚」についてみてみる(表92)。チャートでは、平均値14.5mm、最大値33.8mm、サスカイトでは平均値20.7mm、最大値47.1mmであり、チャートとサスカイトでは後者がまさり、「最大幅」と同様な傾向がうかがえる。「打面厚」は、チャートの平均値6.4mm、最大値24.5mm、サスカイトの平均値は6.5mm、最大値16.8mmとなり、石材による差異は認められない。

2) 定性的属性

次に、打面形状をみてみる(表97)。チャートでは「平坦」が40点(85.1%)、次いで多いのは「山形」(3点、6.4%)であり、点状・線状打面はごくわずかに含まれる。サスカイトも同様、「平坦」が55点(77.5%)と多くを占めるが、「山形」が15点(21.1%)とやや多くみられる点が、チャートとは若干異なる。

次に、打面構成を表したものが表98と図124である。チャートでは、「単剥離面」が最も多く25点(69.4%)、次いで複剥離打面が6点(16.7%)と両者で大部分を占める。サスカイトでは、「単剥離面」が47点(66.2%)、「複剥離面」16点(22.5%)とチャートと比較して後者の割合が高くなる。石材により、やや「複剥離面」の割合が異なる点が指摘できる。

背面構成は、チャートは、28点(64%)と主剥離面と同一方向のものがもっとも多い。さらに、同一方向と直交もしくは対向する2方向からのがそれに次ぐ。方向としては、同方向と対向する2方向からのものが多い。対して、サスカイトでは、主剥離面の剥離方向と同一のものが多いという点ではチャートと変わらないが、3方向または4方向といったものもみられる。ブロック間比較でも述べたが、サスカイトは打面転位が多い、もしくは1石核から剥離される剝片が多い可能性も考えられる。

次に、自然面の付着をみてみる(表99、図125)。チャートでは、背面がすべて自然面のものは、2点(4.7%)と非常に少ないので対し、一部に自然面を残すものをみると20点(46.5%)と増加する。一方、サスカイトでは自然面が残置しないものが63点(84.0%)と多くを占め、遺跡内における両石材の状態を反映していると考えられる。つまり、チャートは原石もしくはそれに近い状態で遺跡に持ち込まれているのに対して、サスカイトは剥離の進んだ状態であったことを示しているのであろう。

(2)七日市遺跡(兵庫県氷上郡春日町)

これまで3次(1981・1984・1997)にわたる調査が実施されており、近畿地方においてAT下位の石器群における重複する文化層の確認できる好資料となっているのは周知のとおりである。第Ⅱ～Ⅳ文化層の3つが確認されている。今回は、既報告分の第Ⅱ文化層を対象とする。

報告書によれば、第Ⅱ文化層の石器の出土点数は1,982点である(礫は含んでいない)。石器ブロック42基、礫群、配石より構成されている。石器組成は、表91に示す通りである。ナイフ形石器・「小型部分加工石器」・スクレイパー・抉入石器・鋸歯縁石器・楔形石器・局部磨製石斧などである。ナイフ形石器などの製品の割合が10～20%、石核5%であるが、「チップ」の割合が14%と低くなっているのが特徴である。石材は、チャートがほとんどとその主体を占めており、わずかながらサスカイトや黒耀石も組成する(兵庫県教育委員会 1990)。

七日市遺跡第Ⅱ文化層の対象資料数はチャートの剝片83点である。

「最大長」(表93)は、平均値33.2mm、最大値62.0mmであり、25.1~50.0mmに多くが集中し、その中心は20.1~25.0mmである。「最大幅」(表94)は、平均値30.3mm、最大値51.9mmである。集中域は30.1~35.0mmである。中央値は30.0mmと平均値との差はみられない。なお、「最大厚」(表95)は、平均値10.3mm、最大値23.6mm、集中域は7.6~9.0mmとなる。

長幅比(表96)は平均値117.3、最大値190.8であり、100~140の間に集中しており、栗生間谷遺跡・板井寺ヶ谷遺跡と同様、縦長状の傾向がみえる。チャートが縦に長くなる傾向がみられるることは一般的なことといえるであろう。

次いで「打面幅」と「打面厚」(表92)についてみてみる。「打面幅」は、平均値が16.6mm、最大値42.6mm、「打面厚」は平均値7.0mm、最大値17.8mmである。

打面形状(表97)は、「平坦」が69点(92.0%)と大多数を占める。一方、「山形」は3点(4.0%)と極端に少なくなっている。

打面構成(表98・図134)では、「自然面」が最も多く37点(50.0%)、次いで「単剥離面」が29点(39.2%)と両者でほとんどを占めており、若干、「節理面」が含まれる。自然面打面の多さから考えると、石材は原石もしくはそれに近い状態で遺跡内に持ち込まれたと考えられる。

背面構成は、主要剝離面と同一方向のものが最も多く40点(48%)、次いで、同方向と直交のものの順となる。しかし、これは資料数が少ないため指摘するにとどめる。

自然面の付着(表99・図135)をみると、背面がすべて自然面のもの2点(2%)と一部に自然面が付着するのもの56点(71%)とでその多くを占める。これは、チャートが原石に近い状態で遺跡内に存在し、また付着率の多さからみて近在において採取可能であつてみることができよう。

(3) 2 遺跡の比較

これまで、板井寺ヶ谷遺跡下位文化層と七日市遺跡第Ⅱ文化層の剝片を比較してきた。先にも述べたように資料数には限界があるかもしれないが、傾向は捉えられたと考えている。

まず、石材による違いはここでも明白であった。たとえば、「最大長」・「最大厚」ではチャートがサヌカイトより際立って大きいが、最大幅は両者が逆転するのはブロック間比較の結果と同じである。また、サヌカイトは「山形」の打面形状が多くなり、打面構成でも多剝離打面が増加し、さらに、背面構成でもチャートより他方向からの剝離により構成されるものがみられる点においても、同じ結果が得られた。これは、サヌカイトの石質および異なる剝離方法のあらわれであろう。

しかし、両遺跡におけるチャートを比較した結果は、七日市遺跡の剝片は板井寺ヶ谷遺跡のそれに比べ、厚みのあるやや幅をもった縦長状の剝片であることがわかる。「最大長」・「最大幅」・「最大厚」・「打面幅」・「打面厚」のいずれをとっても、前者が後者よりもまさっているのである。ただ、前者は大きさを示す属性の数値は大きいのに対して長幅比は小さくなってしまっており、後者より寸詰まりの剝片であるということを示している。最も異なる点は、自然面の付着率である。七日市遺跡第Ⅱ文化層では7割以上の剝片に自然面が残置しているのに対し、板井寺ヶ谷遺跡下位文化層ではおよそ半分となる。そして、これは打面構成にも反映しており、自然面打面と単剝離面打面の出現率の違いとしてあらわれてくるのである。しかし、打面形状をみると両者とも違いはみられない。ということは、自然面打面とは平坦な形状を呈したものであり、打面としては、「単剝離面」も「自然面」も平坦であるという状況的には相違ないと考えられるのではなかろうか。このように考えると、打面形状・打面構成などの定性

的属性についても大きな相違はみられないである。

以上のように、両遺跡の差異は、チャートとサヌカイトという石材においては明確であるが、チャート同士では自然面の付着以外はみられない。

4 遺跡間比較

これまで、粟生間谷遺跡内のブロック1・3・6と板井寺ヶ谷遺跡・七日市遺跡の属性をみてきた。それぞれの特徴が明らかになったところでブロック1と2遺跡の比較をしてまとめとする。

まず、定量的属性では、チャート剝片の「最大長」・「最大幅」・「最大厚」・「重量」のいずれをとってもブロック1が小形である。平均値でみると、「最大長」・「最大幅」では、板井寺ヶ谷遺跡・七日市遺跡が30.0mm前後であるのに対して、ブロック1は20.0mmにも満たない。また、「最大厚」は、前者が10.0mm前後であるのに対し、後者は5.0mm以下である。さらに、打面は決定的に異なる。「打面幅」は、前者が14.0～15.0mm、後者が11.1mmとなり、同様に「打面厚」も6.4mm、7.0mmなのに比べ、4.2mmとなっている。ブロック1の打面の小ささは何を意味しているのであろうか。打面構成をみてみると、2遺跡に比べ「多剝離面」が多い。また、打面形状も「山形」の比率が高い点で異なる。つまり、定量的属性・定性的属性のどちらをみても、ブロック1と2遺跡との違いは明らかである。

七日市遺跡は、自然面の付着率の多さからみても、近隣においてチャートが豊富に採取可能な場所であることは明らかであろう。また、七日市遺跡ほどではないにしろ、剝片の属性値の類似から板井寺ヶ谷遺跡においてもチャートは近隣において採取可能な石材であったと考えられる。他方、ブロック1は両遺跡に比較して極端に属性値が低いこと、さらに自然面の付着の少なさから考えると、チャートは近在において採取したものとは考えにくい。そして、この違いが、2遺跡とブロック1の打面形状や打面構成にも反映しているのではなかろうか。言い換えれば、ブロック1は原石の変形・縮小がかなり進行した状態の遺跡ということができるであろう。

今回、ブロック1の石器群の実態に迫るべく属性分析をおこなってきたが、ブロック1は、板井寺ヶ谷遺跡・七日市遺跡と比較すると大きく異なっていた。それに比して、ブロック3・6とは、2遺跡よりは非常に近い様相を呈しているということができるであろう。つまり、チャートを主体としていること、また器種組成が貧弱な点が、ブロック1をブロック3・6と異なるようにみせている原因の1つとして挙げられるのではなかろうか。

5 おわりに

今回ブロック1の実態に迫ることを目的として分析を進めてきた。その結果からいえることは、石材による差異は多少認められるが、ブロック1・同3・同6は製作痕跡からみると非常に近い存在であるということであろう。

また、板井寺ヶ谷遺跡・七日市遺跡と比較することで粟生間谷遺跡の消費地的性格が明らかとなった。今回は、資料的限界から傾向を捉えたに過ぎないが、今後とも資料の増加を目指し、さらに周辺の遺跡との比較を進めていきたいと考える。こうした積み重ねが、各々の石器群の実態といったもの明らかにしていく一つの方法と考えるからである。

謝辞

本稿を執筆するにあたり、資料見学に際しては、兵庫県教育委員会の藤田 淳氏にいろいろと便宜を図っていただいた。また、鈴木忠司先生をはじめ、伊藤栄二氏、久保弘幸氏、新海正博氏、野口 淳氏、森川 実氏、森先一貴氏、山本 誠氏には有益なご教示を得たことを深く感謝いたします。

(手島美香)

註

- 1) ここでは、座標値があるもののみ対象としている。
- 2) 器種の記載は報告書によっているが、各遺跡特有の器種については括弧つきで記す。
- 3) ただし、完形値を用いるためそれぞれの項目において若干点数が異なる。

引用・参考文献

- 兵庫県教育委員会 1990 『七日市遺跡（I）（旧石器時代遺跡の調査）』
 兵庫県教育委員会 1991 『板井寺ヶ谷遺跡 旧石器時代の調査』
 久保弘幸 1989 「大阪湾沿岸地域における小型ナイフ形石器とその編年について」『旧石器考古学』38 pp.83-92
 久保弘幸 1994 「瀬戸内技法を伴う石器群の変遷」『瀬戸内技法とその時代 本編』中・四国旧石器文化談話会 pp.111-123
 野口 淳 1995 「遺跡における石器組成－石器の「製作－廃棄連鎖」の検討－」『旧石器考古学』54
 松藤和人 1980 「近畿・瀬戸内地方におけるナイフ形石器文化の諸様相」『旧石器考古学』21 pp.213-259
 松藤和人 1992 「大阪平野部における旧石器編年研究に寄せて」『旧石器考古学』44 pp. 11-23

表92 定量的属性の代表値

遺跡		長さ(mm)		幅(mm)		厚さ(mm)		重量(g)		長幅比		打面幅(mm)		打面厚(mm)		剥離角(°)	
		Ch	Sa	Ch	Sa	Ch	Sa	Ch	Sa	Ch	Sa	Ch	Sa	Ch	Sa	Ch	Sa
IT	平均値	33.7	25.3	32.7	34.3	9.3	7.0	9.0	5.5	110.3	76.4	14.5	20.7	6.4	6.5	107.3	113.4
	中央値	33.2	24.4	29.5	33.3	8.7	6.5	6.9	4.5	100.0	70.9	15.2	19.5	6.0	5.4	106.0	115.0
	最大値	57.8	48.2	74.5	58.9	21.0	17.1	33.6	25.5	220.6	187.2	33.8	47.1	24.5	16.8	131.0	140.0
	標準偏差	7.73	8.22	11.32	9.89	3.31	2.97	6.73	4.65	40.70	30.10	7.44	9.94	4.32	3.27	10.20	16.10
	N =	40	68	40	57	49	75	49	73	31	53	47	73	43	71	47	73
NK II	平均値	33.2	-	30.3	-	10.3	-	9.4	-	117.3	-	16.6	-	7.0	-	101.9	-
	中央値	31.3	-	30.0	-	9.3	-	6.3	-	112.7	-	15.8	-	6.6	-	102.0	-
	最大値	62.0	-	51.9	-	23.6	-	55.4	-	190.8	-	42.6	-	17.8	-	140.0	-
	標準偏差	10.97	-	8.96	-	4.34	-	9.19	-	36.60	-	8.36	-	3.72	-	13.88	-
	N =	71	-	66	-	83	-	82	-	51	-	70	-	74	-	76	-

表93 「最大長」度数分布表

長さ(mm)		IT						NKII		BL1					
階級	階級上限	度数	%	Ch	%	Sa	%	度数	%	度数	%	Ch	%	Sa	%
1	15	6	5.6	0	0.0	6	8.8	2	2.8	6	10.2	13	36.1	9	30.0
2	20	17	15.7	2	5.0	15	22.1	3	4.2	17	28.8	11	30.6	10	33.3
3	25	19	17.6	3	7.5	16	23.5	17	23.9	17	28.8	6	16.7	3	10.0
4	30	14	13.0	4	10.0	10	14.7	11	15.5	9	15.3	1	2.8	4	13.3
5	35	29	26.9	15	37.5	14	20.6	10	14.1	4	6.8	5	13.9	1	3.3
6	40	13	12.0	9	22.5	4	5.9	7	9.9	4	6.8	0	0.0	2	6.7
7	45	6	5.6	5	12.5	1	1.5	9	12.7	2	3.4	0	0.0	0	0.0
8	50	2	1.9	0	0.0	2	2.9	8	11.3	0	0.0	0	0.0	0	0.0
9	55	1	0.9	1	2.5	0	0.0	2	2.8	0	0.0	0	0.0	0	0.0
10	60	1	0.9	1	2.5	0	0.0	1	1.4	0	0.0	0	0.0	0	0.0
11	65	0	0.0	0	0.0	0	0.0	1	1.4	0	0.0	0	0.0	1	3.3
N =		108	100.0	40	100.0	68	100.0	71	100.0	59	100.0	36	100.0	30	100.0

表94 「最大幅」度数分布表

幅 (mm)		IT						NK II		BL1					
階級	階級上限	度数	%	Ch	%	Sa	%	度数	%	度数	%	Ch	%	Sa	%
1	15	0	0.0	0	0.0	0	0.0	1	1.5	2	3.0	13	30.2	17	48.6
2	20	4	4.1	3	7.5	1	1.8	7	10.6	23	34.8	12	27.9	8	22.9
3	25	12	12.4	4	10.0	8	14.0	11	16.7	18	27.3	7	16.3	6	17.1
4	30	27	27.8	14	35.0	13	22.8	14	21.2	10	15.2	5	11.6	0	0.0
5	35	15	15.5	7	17.5	8	14.0	16	24.2	5	7.6	1	2.3	3	8.6
6	40	14	14.4	3	7.5	11	19.3	6	9.1	4	6.1	4	9.3	1	2.9
7	45	12	12.4	4	10.0	8	14.0	8	12.1	3	4.5	0	0.0	0	0.0
8	50	5	5.2	2	5.0	3	5.3	1	1.5	0	0.0	1	2.3	0	0.0
9	55	5	5.2	1	2.5	4	7.0	2	3.0	1	1.5	0	0.0	0	0.0
10	60	2	2.1	1	2.5	1	1.8	0	0.0	0	0.0	0	0.0	0	0.0
11	65	0	0.0	0	0.0	0	0.0	0	0.0	0	0.0	0	0.0	0	0.0
12	70	0	0.0	0	0.0	0	0.0	0	0.0	0	0.0	0	0.0	0	0.0
13	75	1	1.0	1	2.5	0	0.0	0	0.0	0	0.0	0	0.0	0	0.0
N =		97	100.0	40	100.0	57	100.0	66	100.0	66	100.0	43	100.0	35	100.0

表95 「最大厚」度数分布表

厚さ (mm)		IT						NK II		BL1					
階級	階級上限	度数	%	Ch	%	Sa	%	度数	%	度数	%	Ch	%	Sa	%
1	1.5	1	0.8	0	0.0	1	1.3	0	0.0	1	0.7	0	0.0	1	1.5
2	3.0	1	0.8	0	0.0	1	1.3	0	0.0	43	29.7	24	30.4	19	29.2
3	4.5	10	8.1	1	2.0	9	12.0	3	3.8	45	31.0	22	27.8	22	33.8
4	6.0	26	21.0	5	10.2	21	28.0	7	8.8	23	15.9	12	15.2	11	16.9
5	7.5	27	21.8	9	18.4	18	24.0	10	12.5	11	7.6	5	6.3	6	9.2
6	9.0	25	20.2	12	24.5	13	17.3	21	26.3	10	6.9	5	6.3	5	7.7
7	10.5	14	11.3	10	20.4	4	5.3	11	13.8	4	2.8	3	3.8	1	1.5
8	12.0	8	6.5	4	8.2	4	5.3	10	12.5	3	2.1	3	3.8	0	0.0
9	13.5	4	3.2	4	8.2	0	0.0	5	6.3	1	0.7	1	1.3	0	0.0
10	15.0	2	1.6	1	2.0	1	1.3	5	6.3	1	0.7	1	1.3	0	0.0
11	16.5	2	1.6	0	0.0	2	2.7	2	2.5	1	0.7	1	1.3	0	0.0
12	18.0	3	2.4	2	4.1	1	1.3	2	2.5	0	0.0	0	0.0	0	0.0
13	19.5	0	0.0	0	0.0	0	0.0	4	5.0	2	1.4	2	2.5	0	0.0
14	21.0	1	0.8	1	2.0	0	0.0	0	0.0	0	0.0	0	0.0	0	0.0
N =		124	100.0	49	100.0	75	100.0	80	100.0	145	100.0	79	100.0	65	100.0

表96 長幅比度数分布表

長幅比		IT						NK II		BL1					
階級	階級上限	度数	%	Ch	%	Sa	%	度数	%	度数	%	Ch	%	Sa	%
1	0.0	0	0.0	0	0.0	0	0.0	0	0.0	0	0.0	0	0.0	0	0.0
2	20.0	0	0.0	0	0.0	0	0.0	0	0.0	0	0.0	0	0.0	0	0.0
3	40.0	1	1.2	0	0.0	1	1.9	0	0.0	2	4.7	0	0.0	2	9.5
4	60.0	16	19.0	1	3.2	15	28.3	3	5.4	4	9.3	0	0.0	4	19.0
5	80.0	28	33.3	7	22.6	21	39.6	5	8.9	9	20.9	5	35.7	4	19.0
6	100.0	14	16.7	8	25.8	6	11.3	14	25.0	5	11.6	1	7.1	4	19.0
7	120.0	11	13.1	4	12.9	7	13.2	12	21.4	8	18.6	6	42.9	2	9.5
8	140.0	6	7.1	5	16.1	1	1.9	6	10.7	3	7.0	0	0.0	3	14.3
9	160.0	3	3.6	3	9.7	0	0.0	7	12.5	2	4.7	1	7.1	1	4.8
10	180.0	2	2.4	1	3.2	1	1.9	6	10.7	1	2.3	0	0.0	1	4.8
11	200.0	1	1.2	0	0.0	1	1.9	3	5.4	1	2.3	1	7.1	0	0.0
12	220.0	1	1.2	1	3.2	0	0.0	0	0.0	0	0.0	0	0.0	0	0.0
13	240.0	1	1.2	1	3.2	0	0.0	0	0.0	0	0.0	0	0.0	0	0.0
14	260.0	0	0.0	0	0.0	0	0.0	0	0.0	0	0.0	0	0.0	0	0.0
N =		84	100.0	31	100.0	53	100.0	56	100.0	35	81.4	14	100.0	21	100.0

表97 打面形状

打面形状	IT						NK II		BL1					
	度数	%	Ch	%	Sa	%	度数	%	度数	%	Ch	%	Sa	%
平坦	95	80.5	40	85.1	55	77.5	69	92.0	54	70.1	23	65.7	31	73.8
山形	18	15.3	3	6.4	15	21.1	3	4.0	10	13.0	5	14.3	5	11.9
点状	4	3.4	3	6.4	1	1.4	2	2.7	7	7.8	3	8.6	3	7.1
线状	1	0.8	1	2.1	0	0.0	1	1.3	6	9.1	4	11.4	3	7.1
N =	118	100.0	47	100.0	71	100.0	75	100.0	77	100.0	35	100.0	42	100.0

表98 打面構成

打面構成	IT						NK II		BL1					
	度数	%	Ch	%	Sa	%	度数	%	度数	%	Ch	%	Sa	%
单剥離面	72	63.2	25	69.4	47	66.2	29	39.2	39	52.7	10	35.7	23	65.7
複剥離面	22	19.3	6	16.7	16	22.5	4	5.4	0	0.0	0	0.0	0	0.0
多剥離面	4	3.5	1	2.8	3	4.2	0	0.0	27	36.5	13	46.4	12	34.3
自+剥	2	1.8	2	5.6	0	0.0	1	1.4	1	1.4	1	3.6	0	0.0
自然面	14	12.3	2	5.6	5	7.0	37	50.0	3	4.1	1	3.6	0	0.0
節理面	0	0.0	0	0.0	0	0.0	3	4.1	4	5.4	3	10.7	0	0.0
計	114	100.0	36	100.0	71	100.0	74	100.0	74	100.0	28	100.0	35	100.0

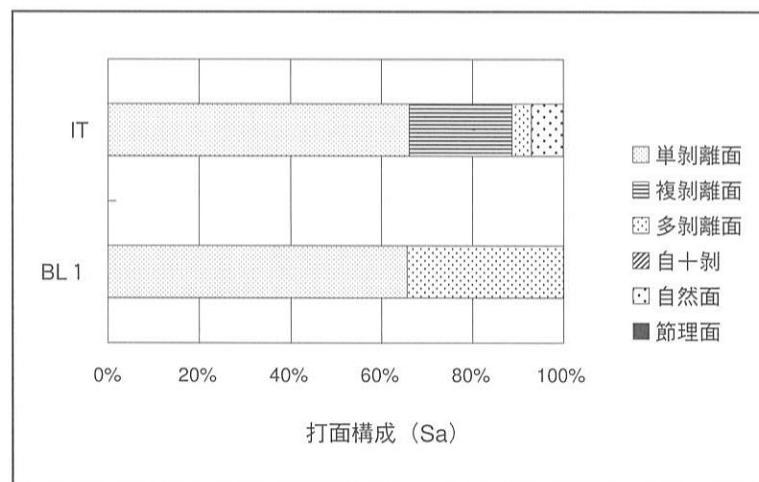
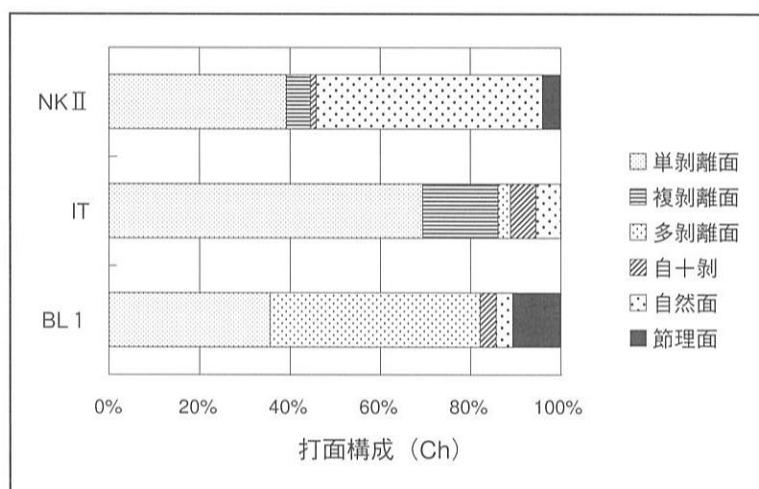


図134 「打面構成」 チャート（上）・サヌカイト（下）

表99 自然面の付着

自然面	IT						NKII		BL1					
	度数	%	Ch	%	Sa	%	度数	%	度数	%	Ch	%	Sa	%
全面	8	6.8	2	4.7	6	8.0	2	2.4	4	3.3	2	3.7	2	3.0
一部	26	22.0	20	46.5	6	8.0	59	71.1	17	14.2	12	22.2	5	7.6
無	84	71.2	21	48.8	63	84.0	22	26.5	99	82.5	40	74.1	59	89.4
計	118	100.0	43	100.0	75	100.0	83	100.0	120	100.0	54	100.0	66	100.0

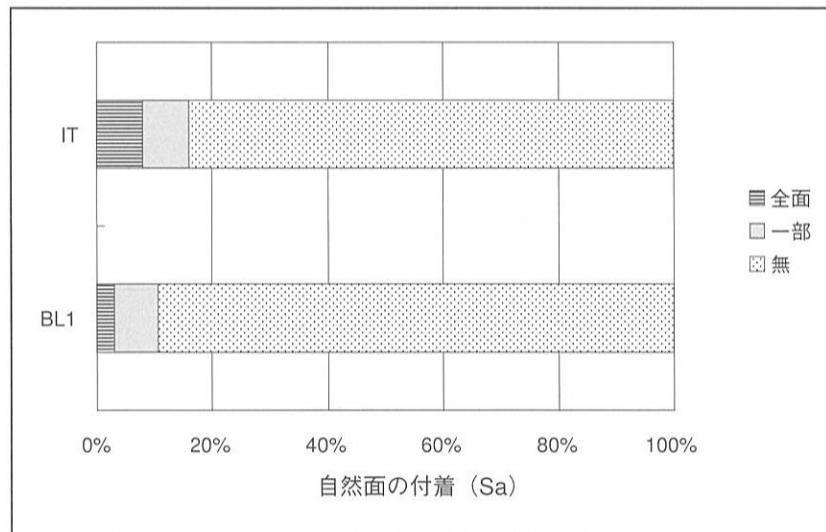
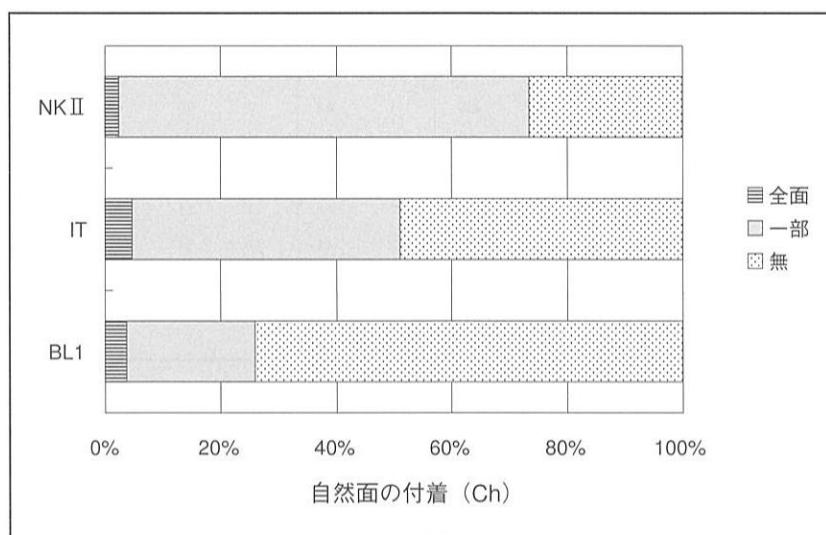


図135 自然面の付着 チャート (上)・サヌカイト (下)